合唱を通して感じたこと

音楽コンクールや音楽発表会を終えて，１週間以上が経とうとしています。６年生は久しぶりののんびりした日々を過ごしています。というのも先週は６年生にとって半年ぶりに穏やかに過ごせる日々でした。春先から，入学式，運動会，音楽コンクール，修学旅行，陸上記録会，児童会選挙，何かしら行事のための動きが，途切れることなく日々の生活の中にあったのですが，今は，あまり何も抱えずに，のんびり過ごすことができます。

さて，その音楽発表会が終わった日の５時間目に書いた子供達の作文をじっくり読みました。子供達は６月から本番までの合唱を通して，様々なことを感じ，学んでいました。そのいくつかをご紹介します。

『今までの練習，結果＆その後』

「♪人は～みんな誰でも～」私たちは６年生の６月から１０月２６日の音楽コンクールに向けて，毎日必ず１時間～２時間くらい練習がありました。多い時は間をあけて３時間ぐらいありました。ときには「合唱したくないなあ～」と思う時もありました。でも，気持ちはそうだったかもしれないけれど，歌ってみるとやっぱり楽しかったり，ほめられて嬉しかったりしました。

１０月２６日が近付くにつれて緊張するのもあったけど，心がザワザワするほうが強くなり，当日になるとそのザワザワが激しくなりました。会場ではほかの学校が歌っていてプレッシャーを感じました。いよいよ自分たちの番が来ました。今までの練習の成果を十分に発揮して歌いきりました。今までで一番良かったと思いました。結果がとても待ち遠しかったです。

次の日に結果発表で，先生が結果の紙を開こうとするときに，どこか暗い感じがしました。私はわざとしているのかなと思いましたが，私の感じたことが当たっていました。優秀校に学校の名前が出なかったので，グランプリかと思ったら入選さえしていませんでした。とてもショックでした。グランプリをとれると思っていたので本当にショックでした。（中略）

結果発表の翌日の金曜日に合唱の練習があったけど，私はそんな気持ちになれませんでした。歌っていても結果を思い出して途中で歌えなくなりました。そんな中で，音楽発表会がきました。私は思いっきり歌いました。金曜日に歌えなかったのに，歌えました。少し気持ちがすっきりしました。

『流した涙』

くやしい。もうその言葉しか思いつかなくなってしまった。なんで～？？先輩たちにはとれて，私達にはとれないの？　すべて自問自答。でも答えはいっこうに見つからない。

「グランプリ・・・・・・・高須。」

この言葉を聞いた瞬間，私はこう思った。ウソでしょ。ドッキリだよね。先生笑ってよ～！この瞬間，密室に閉じ込められ，あたりが真っ黒になるような気がした。一度流した涙は止まらず。教室でただ泣き崩れていた。そんな中，一筋の光が差し込んだ。「悲しい時も，仲間がいればつらくなはない。」私の体は勝手に動き，黒板にそう書いていた。思いつきで書いたその言葉。そのあと，どんどん言葉が思い浮かんだ。「６年最高」「笑顔№1」「グランプリ直美受賞」「流した涙は虹色の明日になる」「こんな時こそ一致団結」どれもみんなを励ます言葉になったらいいな。

「みんなに感謝」また一つ，みんなへのメッセージを思いついた。みんな，ありがとう。

『これまでしてきたこと・・・』

今回の結果は，うれしくない結果となってしまったけれど，悪くもなかったと思います。結果を聞いた時に，「えっ？」とみんな言いました。頑張ってきたのに賞がとれなかったので泣いてしまいました。とても悲しくて，家に帰っても元気は出ませんでした。本当に，本当に残念でした。でも次の日学校に行くと，みんなが黒板にいろんなことを書いていました。（前号参照）

そして，金曜日の合唱の練習の時，いつもの力が出せなくて，とてもつらかったです。そして先生が泣き出したので，本当に悲しくてみんな泣いていました。ふだん泣かない人も泣いていて，本当にみんな頑張ったんだなと思って，逆に少しうれしくなりました。その日から「ポジティブ」と書いた紙をベッドの上に貼ってあります。それを毎日見て，元気を出しています。

結果はよくなかったけど，本当に大切な体験だったと思います。この悔しい気持ちを忘れずに，今後も過ごしていきたいと思います。（田中先生に）グランプリ直美をもらえてとてもうれしかったです。田中先生には，とても感謝しています。音楽発表会で泣いてもらったとき，歌をがんばってきてよかったなと思いました。本当にありがとうございました。

『これまでの練習を振り返って』

１０月２６日水曜日の音楽コンクールにむけて，私たちは約半年，課題曲「すてきな友達」と自由曲「ぼくのおうえんか」の練習をたくさんしてきました。口の開け方や語頭をはっきりすること，表情など，たくさんのことを田中先生や淺岡先生，吉原先生に教えてもらいました。

そして，当日となりました。だんだん緊張してきて，心臓がとてもドキドキしていました。前の学校の歌が終わって，いよいよ私たちの番になりました。表情や（歌うのが）早くならないようにすることなどに気を付けて，最高にすごい合唱をすることができました。

次の日の夕方，結果が来ました。先輩たちが築き上げた伝統を壊してしまったという罪悪感だけが心に残りました。家に帰ってお姉ちゃんに言うと，

「聞きにいた人が，去年よりよかったよって言ってたから，別にいいんじゃない」

と，優しく言ってくれたので，心が温かくなりました。それでも，毎日のように涙が出てきました。だから，音楽コンクールはだめだったけど，日曜日の音楽発表会はがんばろうと思いました。

そして，発表会当日となりました。途中で涙が出たらどうしようと思ったけど，一番上手に歌えたなと思いました。最高の歌声を届けることができて良かったです。最後の音楽発表会はいい思い出になりました。

『合唱』

音楽コンクールの結果について，まだ納得できていません。どうして・・・？と思うことしかできません。音楽コンクールの結果を聞いて，はじめは受け入れることができませんでした。でも結果を受け入れると，涙があふれてきました。金曜日，結果を聞いて初めて歌ったとき，私はいつものように歌うことができませんでした。自分の歌に自信を持つことができなかったからだと思います。音楽コンクール当日，私はグランプリをとるという気持ちで行きました。多分そう思っているのは，私だけではないと思います。そういう気持ちが大きかったからこそ，結果を受け入れることができませんでした。

今日，音楽発表会では，力いっぱい歌い切れたと思います。私は今までたくさんのことを，田中先生，淺岡先生，吉原先生から学ぶことができてすごくうれしいです。私たちはもう，みんなそろって「すて

きな友達」「ぼくのおうえんか」を歌うことはないと思います。だからこそ，今日たくさんの人に，私たちの歌を聞いてもらえてうれしかったです。（中略）６年生の合唱は最高です。

『音楽コンクールと音楽発表会の気持ち』

10 月26 日の音楽コンクールを終えたとき，グランプリは審査員の気持ち次第だけと優秀賞は絶対にとれたと思っていた。けれども現実は厳しかった。結果を聞いて，グランプリはおろか，優秀賞すら届かなかったことを知った。

「二次発表会でがんばればいい」「最高の音楽を届けることができたのだから，それでいい。」

と一生懸命思っても，涙があふれて止まらなかった。どれだけ思っても，泣かなくてもいと考えていても，結果は変わらない。涙がどんどん出てきた。でも，

「ここで立ち止まっても，なげいても，何も変わらないのなら，今からがんばるしかない。」

と涙をふいて思った。（中略）6 年生の番が来た。今までやってきたことを考えて歌った。音楽コンクールでのくやしさや悲しさも心のかたすみに残しておきながら。

『今までのこと』

今までのことを振り返ってみると，最初は全然歌えなかったのに成長したなと思います。今思うと，最初のころ，何回も歌を聴き，覚えながら少しずつ歌っていたのが懐かしいです。そして，楽譜を見ながらでも，全部歌えた時はうれしかったです。それからどんどん成長して，楽譜を見なくても歌えた時もとてもうれしかったです。

その後，顔の筋肉を上げる練習などがきつくてきつくて，「いやだな」と思っていたけれども，練習すればするほど楽しくなりました。そして，練習を始めて３か月くらいでずいぶんうまくなり，練習の時は時間が経つのが早く感じるほど楽しかったです。

音楽コンクール当日は，今までの練習の成果を生かして，これまでの中で一番いい歌声でした。でも，音楽コンクールの結果を聞いて「え・・・，嘘だ。」と思いました。でも悔いはありませんでした。

次の日，練習の時に歌うと涙が出てきました。でも，涙を流しながらも歌い切りました。

音楽発表会では，今までの経験をいかして，音楽コンクール以上の歌声が出せました。

今までがあっという間でした。今までで最高の時間でした。

「優秀校がとれなくても，グランプリ直美がある！！」

『試練』

「目には見えないけれど，グランプリ・それ以上のものがきっとあった。」

ぼくは，感動しながらこう思った。世界一の歌になったと思う。しかし，この頂点にたどり着くまでは，大きな試練を乗り越えなければならなかったのだ。

ぼくたちは，音楽コンクールにいどんだ。絶対グランプリをとるという志をもった。笑顔・母音・語頭などすべてを注意して歌った。歌い終わったあの時。ぼくは飛び上がりそうなくらいうれしかった。地域の方や学校関係者の方からほめていただき，歌ってよかったと思っている。

でも，現実は厳しいものである。グランプリも優秀賞も取れなかったのだ。11 年優秀賞を取り続けた伝統を消してしまった。ぼくは悲しみやくやしさで胸が張り裂けそうになり，涙がだんだん零れ落ちていった。なんで取れなかったのかわからなかった。生きている意味もなくなったと思った。

その時，黒板にあった文字が目に入った。「悲しいことも仲間がいればつらくはない。」た。この言葉で，ぼくに希望の光が見えた。そして，次の音楽発表会を，グランプリ以上の世界一にしようと思った。これは，今思えば，悲しみを乗り越えて虹色の明日へと続くための試練だったのかもしれない。

ぼくは宣言通り，二次発表会の演奏を世界一にした。乗り越えてよかったと思う。そして，この試練を終えてこう思った。

「試練，その先に待っているものは希望。」

ただ，音楽コンクールに対して次のような思いを抱いている子もいました。

『音楽コンクールに対する思い』

なぜ，音楽コンクールで賞が取れなかったんだろうと，自分で自分に問いをする。すると，なぜコンクールがあるのか，なぜ順位をつけないといけないのか，という問いが返ってきた。なぜ順位をつけないといけないのだろうと確かに思う。目標に向かって頑張るためには，必要なのかもしれないけれど，そうやって頑張ってきたのに賞をとれなかった学校はどうなるのか？　ただ泣いて気持ちの整理がつかないまま終わってしまう。賞がとれた学校は「よかった～」と言ってひたすら喜ぶことだろう。でも，僕たち向東小学校の６年生は，たった６分２１秒のために，４か月も練習してきた。時には灼熱地獄の中で，ときには３０分間ただ立ち続けるだけ。そんな練習をしてきたのに，何でとれなかったんだろう。あまりに悔しすぎて，泣いていた人だっているというのに・・・。じゃあ，いっそのこと音楽コンクール自体無くしてしまえば，こんなに悔しい思いをすることはなくなるだろう。それができないんなら，せめて順位をつけないようにしてほしい。ただみんなで楽しく歌うだけでは，いけないのだろうか。

ぼくは，もう，こんなに悔しい，悲しい思いをしたくはないし，他の誰にもそうなってほしいとは決して思いません。

さて，今回の合唱に関わってみんな一生懸命，練習してきましたが，歌うことが大好きな子もいれば，当然のことながら歌うのが苦手だったり，嫌いだったりする子もいます。でも，今回の音楽コンクールでは歌が苦手だったり，嫌いだったりした子も，最後の頃の練習や本番で，**最高の表情で全力をつくして歌うことができました**。だからこそ，子供達の歌声は素晴らしかったとも言えます。

最後にそんな子供達の気持ちも紹介させてください。

『音楽コンクールまでの練習や，音楽発表会，音楽自体への思い』

５年生の終わりころから今に至るまで，６分２１秒のために，なんで半年間も練習してきたんだろう。僕は，もともと音楽は嫌いで，音楽で唯一好きなのはリコーダーぐらいです。みんなといるのは好きだけど，一緒に歌を歌うのはあまり・・・。

音をとるのも難しいし，音をちゃんととらないと怒られるし，どうすればいいかなって思ったときに，今，「音楽という授業をしているのだから，他の事は考えずに，今やっていることに集中しろ！！」と心の中に言い聞かせつつも，「やっぱりいやだなー」と思ったりしながら１次発表会まで，長い間練習してきました。毎日の練習はつらく，毎日が地獄でした。

いうのは悪いと思うけど，練習の時，先生たちが言う意味（声の出し方の方法や違い）がよく分かりませんでした（ごめんなさい）。分かったように，首を振ったりして大変でした。

やっと一次発表が過ぎて，あとは二次発表だけと思ったら，音楽コンクールが・・・。すごく嫌だ。審査員にはエリザベト音楽大学の偉い人などが聞いているから地獄だ・・・。グランプリをとるために一生懸命笑顔で歌ったりするのが，大変でつらかったです。

音楽コンクールが終わって，ついに結果発表の時，先生の持っていた紙には向東小学校という文字はありませんでした。聞いた瞬間に，みんなが「え？」「おれらの学校は？」と言っていました。僕もその気持ちでした。「なんでだよ！！」と思っていたら，悔しくなって涙が出ました。音楽コンクールでは最高に，今まで以上にいい音楽を創り上げたのに，なぜ審査員は僕たちの最高と努力に気付いてくれないんだ。でも審査員に文句を言ってはいけない。けど，すごく審査員に文句を言いたくなってしまいました。結果発表の日は，本当に絶望感でいっぱいでした。

グランプリは高須小学校だったけど，僕たちには世界でたった一つの「グランプリ直美」をもっているから，グランプリ直美を誇りに思いたいです。

音楽発表会があって，歌い終わったら，なんだか少しいい気分になりました。いまだに音楽は大大大嫌いだけど，何かの機会で，何かしら歌を歌ってみたいな～，と少し思いました。

いろいろな思いをもちつつ，納得いかなかったり，少しだけ歌が好きになったり，物事を前向きにとらえられるようになったりと，子供達は音楽というもの，あるいは自分のこれからの人生に対して様々なことを感じ・考えることができていました。コンクールという性質上，喜びも悲しみも生まれます。ただ，これらの学びがただの喜びや悲しみに終わるだけなく，一人一人の子供達の生き方に必ず生きるような指導や取り組みを，私達は改めてもっと深く考えていかなくてはいけないと考えさせられました。